論考

宋代の鍊度と知識人

松本浩一

一．はじめに

鍊度とは、死者を救濟する目的を持つ黄籙齋を構成する儀禮の一つで、宋代に完成された破獄から召魂、疾病の治療、沐藤、施食、鍊度、そして傳符授戒に至る一連の儀禮を成している。特に道教的な性格をもつ儀禮として注目されており、一般に「内丹修行を反映した儀禮を經て、死者の身體・靈魂を仙人に相應しいものに變化させる目的を持つ」とされている。

筆者は、二〇一六年に『無上黄籙大齋立成儀』（以下『立成儀』）に記述された道教の普渡儀禮と、正薦（齋主が黄籙齋を施行する際に、主要な救濟對象となる亡魂）のための儀禮の、二つの種類の召魂から傳符授戒までの一連の儀禮を分析したが、そこではこれら二つの儀禮は同様の構成を持ちながら、それぞれの特色を持っていることを論じた。それ以來、金允中『上清靈寶大法』（以下『金氏大法』）、『靈寶領教濟度金書』（以下『濟度金書』）、『無上玄元三天玉堂大法』（以下『玉堂大法』）に記述された、普渡と正薦ための儀禮について同様の考察を行ってきた。そして香港・中文大學での學會發表ではこれらの

道教の死者救濟儀禮は、施餓鬼儀禮から發展した佛教の普渡儀禮とともに、相互に影響しあいながら發展してきたことを論證した。[1]

先述のように錬度は、一般に內丹修行を適用した儀禮を經て、死者の身體・靈魂を仙人に相應しいものに變化させるものとされている。しかし臺北・政治大學での學會發表では、それまでの錬度に關する主な研究を振り返りながら、水火交媾の過程を反映するとされてきた錬度における高功の內錬は、必ずしもそのようにはとらえられないこと、六朝から宋元への「錬」の概念の變化については連續している部分が多いこと、水錬は塵垢を取り除き火錬は身體と魂を冶錬する儀禮ととらえられること、などのことを考察した。[2]

そして「道教の錬度と祭錬について」では、『太極祭錬內法』、『金氏大法』卷一三、『道法會元』卷二一〇「丹陽祭錬內旨」を對象に、祭錬（施食と錬度を合わせて簡略化した）の內容の特色や施行の目的について考察した。[3] 特に『太極祭錬內法』については、その著者である鄭思肖の祭錬についての捉え方や、祭錬を行う目的と、それが現代の臺灣北部の道士が行う超拔に通じるものがあることを指摘した。[4]

しかしこれらの論文でも指摘したように、錬度や祭錬については未だ多くの問題が殘されている。たとえば①錬度の對象となるのは死者の形（身體）なのか、神（靈魂）なのか？これについては、死者はすでに身體を失っているのだから、靈魂しかありえないと考えるのが普通であろう。しかし先に擧げた召魂から始まる一連の儀禮の中では、召魂に續くのは「疾病の治療」であり、身體の缺けた部分が再生され、病が治療される。現在の臺灣でも死者の身體を治療する儀禮は、道教の葬儀や法師の打城において行われている。民閒でも死後の世界において五體滿足であることが重視されており、ましてや天界もしくは仙界に向かうためには必須とされたことは想像に難くない。②このこととも關わるが、錬度を含む一連の儀禮の最終的な目的は死者を仙人にすることなのか、それとも天界に再生させることなのか。③このことは二

○一八年の論文でも觸れたが、水錬火錬の儀禮は具體的に死者に對してどのような處理を行う儀禮なのか。また水火錬度と『九天生神章經』に基づく九天錬度との關係はどのようなものなのか。④錬度の中で發行される化生十二炁符（『立成儀』）、五芽符（『金氏大法』、『濟度金書』ただし五炁の儀禮は『立成儀』にも存在する）、大洞十八玉符（『濟度金書』）の作用はどのようなものであり、錬度とどのように關連するのか。

以上のような問題については、宋代の科儀書にもさまざまに議論されている。これらを編集したのは、陳文龍氏の言葉を借りれば知識人道士ということになる。[5] 日々修行に携わり、あるいは人々のために呪術・儀禮を施す道士たちが、科儀書を編纂しようとするだろうか。これらを編纂するためには、同様の種類の書物を集め、字句の校訂を行ったりしなければならず、實際に金允中やあるいは『太極祭錬內法』の著者である鄭思肖は、このような作業を行ったことを記している。彼らはまさに知識人道士であり、『立成儀』の編者である蔣叔輿も官僚であり、『金氏大法』の編者金允中も科擧を受けたことがある。彼らはテキストの校訂とともに、儀禮の形式の整理や理論化を行ったと考えられる。『金氏大法』中に殘された數多くの金允中のコメントや、『太極祭錬內法』の卷中・下に見られる議論などはこの例であるが、ここでは上に擧げた問題について考察し、さらに金允中のコメントを取り上げて、彼の錬度に關する解釋を考察していきたい。

二．錬度儀禮の內容と問題點

はじめに『金氏大法』卷三七「水火錬度品」と『濟度金書』卷一〇六「明眞齋・錬度儀」、『立成儀』卷二七「上清南宮水火冶錬度命儀」を取り上げ、その呪文と高功の存思內容に注目して、水火錬度は具體的にどのような作業を行っているのか、これと九天錬度の關係はどのようなものなのかについて考察する。そして次に「化生十二炁符」、「五芽符」、「大洞十八玉符」など錬度儀禮で發行される符の役割について述べていくことにしたい。

二・一　水火錬度

『金氏大法』の水火錬度は、水錬から始まる。眞文を燒き、五方の炁を取り込むに際しての存思内容では、その錬度の對象となるものについて、「諸の曹局の功曹は、雲に乘り炁を御し、空に浮んで下り、各の錬に係わる亡魂の爲に、魂神を收召し、その性識を澄ませ、彼らに錬を受けさせると存思する」[6]と述べており、ここでは錬度の對象は「魂神」とされている。そして水錬の目的として、存思内容と呪文には次のような記述がみられる。

「亡魂が水池に入り質を濯（あら）うと存思する」[7]（「十二河源符」を燒く際の存思）

「天帝が敕を發すれば、使者は須く聽くように。亡魂を攝召し、身形を蕩濯するように」[8]（「眞水合同符」を燒く際の呪文）

「大玄なる法水は、五行の數（を表す）。生にあっては萬物を育て、死にあっては能く苦を滌（あら）う。もし大道でないならば、何をもって濟度するのか」[9]（「石景水母符」を燒く際の二番目の呪文）

「天上に生まれることができ、さらに靈妙な教えを受ける。九天の敕により、胎嬰に返り復する。積み重なった穢れは除かれ、屍は生まれ變わる」[10]（玄水を水池に灌ぐときの呪文）

これらからも水錬では、「穢れや罪苦を洗い流す」ことに重點が置かれていることが分かる。また「石景水母符」を燒く際の第一番目の呪文には、「仙人は潤を吐き、亡靈を錬度する。内外は朗徹（清く透き通る）とし、表裏は洞明（あき）らかである。百關・九竅には、元炁が滋り榮える。五臟・六府には、萬神が自ら生ずる。胞胎・結節は、水に隨って扉を開く。死炁は斷絶し、惡根は沈零する。わたしは今錬化して、死骸に魂を生ずる。故（もと）に返（かえ）して貌を改め、玉の體・金の容（すがた）となる。變化し穢を錬して、紫宸（天界）に飛昇する」[11]とある。引用の二句目には「亡靈を錬度する」といっているが、一方で「わたしは今錬化して、死骸に魂を生ずる」といっている。對象は亡魂ではあっても、身體が意識されているのである。また「百關・九竅には、

元炁が滋り榮え。五臟・六府には、萬神が自ら生ずる」と述べているのは、再生のためには炁が返って來て、そこに神が宿ることが必要であることを示している。この考え方は九天鍊度に明確に表現されている。

先論で觸れたように、『立成儀』巻二七に記された鍊度は、火鍊が先でそれに水鍊が續く形になっているが、その水鍊においては、「東井黄華」から始まる呪文と、「已枯復榮」から始まる呪文は『金氏大法』と共通している。さらに「龍漢蕩蕩」から始まる「丹陽鍊度大呪」と呼ばれる呪文は、特に水鍊が何を行うかについては述べていない。ただ「降眞水呪」の「密呪」では「東井の華を運び、以て幽魂を滌（あら）う。これを攬（と）り、太和の津を運び容（い）れる。玄和玉女は、これを神に灌ぐ。魂神は澄み正しく、道炁は長く存す」[12]とあって、やはり水で魂（神）を洗い、清らかにすると述べている。

『濟度金書』巻一〇六に示された水鍊・火鍊については、先論「鍊度的「鍊」」において検討したが、比較のために水鍊に關する主な呪文を示しておくと次のようになる。

「形を鍊して垢を瀹（あら）い、神儀を肅肅とする」[13]（「水鍊符」を宣する際の呪文）

「宿垢を洗い灌ぎ、天根に飛躡する」[14]（「月華符」を宣する際の呪文）

「天河は灌ぎ沐（あら）い、清水は魂を度す。飛英・玄華（鉛＝水）は、囂塵を淘沐（あら）う」[15]（「眞水鍊形符」を宣する際の呪文）

また「黄華蕩形符」を宣する際の呪文は、『金氏大法』で「石景水母符」を燒く際の第一番目の呪文とほぼ同様である。以上のことから、いずれの儀禮書においても、存思や呪文から見える水鍊の目的は、「身體あるいは魂神を對象に、塵垢・罪苦を洗い清める」ことといえよう。

次に『金氏大法』巻三七の火鍊で唱える呪文には、次のようなものがある。

「南方の君、赤炁の精。熒惑使者、丙丁將軍。朱雀炎神は、赫赫たる陽精。五行の造化により、萬物は發生する。天帝に敕が有れば、使者は須く聽くように。亡魂を

攝召し、眞形を錬度するように」[16]（「發火呪」）。

「炎神炎神、火鈴火鈴。上は紫微に通じ、下は黄冥に極まる。邪を却け魂を錬する、赤帝の靈。……火錬によって身體・魂魄は改まり、陰炁・穢炁は消えて、陽炁は盛んになる。精・神は益々壯健で、火鄉に突き抜け入る。九炁（萬物の根源という）を合せて、すべてが道と契る」[17]（「火鈴符」、「錬身符」を燒く時の呪文）。

最初の呪文では、「亡魂を攝召し、眞形を錬度するように」とあり、錬度の對象は「眞形」であるように見える。招くのは「亡魂」であるから、それに伴う「形」は物質としての身體ではない「眞形」なのであろう。二番目の呪文の前半では「魂」が對象である。しかし呪文の後半には「身體・魂魄が改まる」とあるから、やはりここでも形・神の兩者が對象となっていると考えられる。そして「陰炁・穢炁は消えて、陽炁は盛んになる」とある。陰・穢の部分が消えるというのは、水錬で穢れが除かれるのと同様であるが、「陽炁が盛んになる」また「精・神は益々壯健」というのは、火錬による冶錬の結果と言えるかもしれない。

『立成儀』卷二七の火錬で唱えられる呪文については、「南方之君」で始まる呪文（「火錬大呪」と呼ばれている）は共通している。しかし「降眞火呪」とそれに續いて唱えられる「密呪」では、死者の身體・精神が受けるべき處理については明確に述べていない。そして「化生十二炁符」と五方の炁を取る儀禮が終わった後、「丹天火錬大呪」と名づけられた、「炎精二神」から始まる『金氏大法』とほぼ同様の呪文が唱えられる。

次に『濟度金書』卷一〇六の火錬に現れる呪文について見てみる。

「南方炎帝は、精を太微に凝らす。丙丁の正炁、朱雀は輝きを騰（あ）げる。丹鳳は響きを流し、朱煙は散じ飛ぶ。融英は炁を降し、陰儀を冶錬する」[18]。これは「火錬符」を宣する際の呪文で、「陰を冶錬する」とある。

「眞火は陶錬（陶冶の意）し、形・神は肅清だ。罪翳は消滅し、冤債は償われる。經絡藏府（臟腑）には、元陽が茂り榮える。魂魄關節は、一時に靈を回復する。古

い容貌が改められ、萬竅は光明を放つ。永く冥郷を離れて、天界に赴く。壽は天地に均しくなり、億劫の閒安定する」[19]。「玉眸錬質符」を宣する際の呪文で、冶錬によって身體・精神が清められ、犯した罪が消え、被った冤が償われるとしている。

「太陰は形を錬し、太陽は靈を回復する。死體の深い影は陽精を受ける。元炁は重ねて敷かれ、萬神を攝（おさ）め歸す」[20]。「太玄陽生符」を宣する際の呪文で、「炁が敷かれ、神が歸る」というのは九天錬度に通ずる。呪文の後半部分は「百骸・五臟・榮衞・魂魄も再び蘇り、上帝の館に登る」という意味の句が續く。

「太一神は質を錬して神と成す。皮膚毛髪については肝神が明を含める。耳目鼻口については心神が靈を守る。筋骨牙齒については肺神が虚成する。身中の穴や精液については、腎神が育嬰する。内外の榮衞は、脾神が魂を停めさせる。十二羅絡では、陰が極まって陽が生じる。洞陽の火錬によって、玉胞・金晶を錬し。眞人となるを得て、景を神庭に躡（お）う」[21]。これは「火錬變形符」を宣する際の呪文であるが、ここで「質を錬して神と成す」というのは、質すなわち身體を神妙なるものに變化させるのか、もしくは身體を錬して新たな身體を回復し、また各器官の神々を再び安置するということなのか、五臟の神々が擔當の部分を育成していることからして、後者の意味と思われるが、最後は「眞人となって、神庭に遊ぶ」という記述があるので、前者とも解釋できる。

以上のように水火錬度のうち、水錬においては「身體あるいは魂神を對象に、塵垢・罪苦を洗い清める」ことが重視され、火錬は様々に解釋されているが「陰の要素が消えて、陽の要素になり、罪や冤が消える」ことに重點が置かれているといえよう。

二・二　九天錬度

次に九天錬度の内容と目的について論じ、水火錬度との關連についてふれていく。『金氏大法』では「五芽符」の儀禮が終了した後、高功は次のように述べる。「亡過（某）等は、生前早くに世の柵にとらわれ、眞の修行に

暗く、九炁は無に歸し、五行は失われ、三魂は譴責を受け、萬劫の間漂流し、良因がないため、更生の機會を失っていた。私は既に典格によって、眞靈に啓告し、乾坤造化の功を體し、陰陽和合の數に法って、水火を一對として、神形を濯錬し、日月の精華を降して、五行の沖秀を結した。……（そこで）鬼はまた人となり、身はまさに仙化すべきとなった。すでに九天上帝に上奏し、慶祥を分かち、神を生ずる正炁を九關に賜り、胎圓を十月に合わせることを請うた」[22]。すなわち精神・身體を洗い錬したことにより仙化が可能になる。そこで九天上帝に上奏し、新たな身體を生じさせるために九炁を降すことを願うというのである。九天錬度を行う序奏ともいうべき部分である。

『金氏大法』の九天錬度では、始めに「謹んで願わくは帝眞胞命元元一黄演の炁を請う、その胞に纏い、胞の源を宣通させる、上は天に徹して生成させる[23]」と唱えて、第一章符を燒き、「鬱單無量天生神章第一」を唱える。以下九つの炁を請い、各章の符を燒き、各章を唱えていく。しかし九天錬度の目的は、むしろ最後の九つ目の呪文に明確に記されている。「謹んで申し上げます。帝眞嶽府命元自然玄照の炁を請い、その身に纏って、三關・五藏・六府・九宮、金樓・玉室、十二重門、紫戸・玉閣、三萬六千身神、萬八千宮府、三百六十機關、根元・本始をして、一時に神を生じさせるように。神をして炁を布せしめ、炁滿ちて能く聲し、聲は尚（たか）く神は具し、毛髪が身に生じ、諸天は下臨して、以てその身を保つ[24]」。すなわち胞・胎・魂以下九つの器官に對應する炁を降すことを願い、そこに神を招いて死者を新たに再生させるという手續きを行っていくのである。

これが終了すると、高功は次のような內容を告げる。始めに「夫れ三炁は天地の尊であり、九炁は萬物の祖である」と九炁の働きを述べ、そして「今亡過（某）のために、上は九天が炁を降し、五體が神を集めるように請う。既に大道の殊恩を膺（う）け、當に上眞の慈訓を稟ける、蓋し九炁はその神を生じ、三元はその質を育てる」と九天錬度の內容を述べる。次に陰陽五行による世

界の形成、さらに天地と人體の感應の原理を述べていき、「これらはみな大道の妙應であり、神靈の生ずるところである」と結ぶ。天地そして人の創造に關して、炁と神の果たす重要性が強調され、その故に「あなたたちはもしその炁を尊ぶことができず、その神を貴ぶことができず、その始末を省み、その本眞を念ずることができず、躁ぎ動いてすべてが濁り、惡に淫し心を亂せば、則ちその神炁を傷つけ、炁は盡き神は逝き、魂は五道に沈み、魄は三途に歿し、業は九陰に增え、殃は七祖に流れ、生生劫劫に、休息を期することがない、悲しいことではないか」[25]として、生きる上でも炁と神を貴ぶことが重要だとしている。ここでも說教のような內容の言葉を高功に說かせているところはいかにも金允中らしい。

九炁を降すことを請い、『九天生神章經』の各句を唱えることは、『濟度金書』の九天鍊度でも共通しているが、最初に鬱單無量仙吏という仙吏を召請し、對應する場所に行かせて、炁を降すように請うているところは、『金氏大法』とは異なっている。「謹んで鬱單無量仙吏を召す、上りて無映玄臺に詣で、帝眞胞命元元一黃演の炁を降ろすことを請うように、九重に下降し、受鍊の幽靈のためにその胞に纏わせ、胞元をして宣通させ、上は天に徹し以て生成するように[26]」。そして『金氏大法』と同樣に、九つ目のところでは「謹んで無想無結無愛仙吏を召す、上りて九華寶臺に詣で、帝眞嶽府命元自然玄照の炁を降ろすことを請うように、九重に下降し、受鍊の幽靈のためにその身に纏わせ、三關・五藏・六府・九宮、金樓・玉室、十二重門、紫戶・玉閣、三萬六千官府、三百六十骨節、根源・本始をして、一時に神を生じさせ、萬神をして具備せしめ、毛髮をして身に生ぜしめ、諸天は下臨して以て生ずるを得せしむるように[27]」と結んで、炁によって身體を再生させるとともに、諸神を各所に配置している。

しかし『立成儀』では靈寶九鍊符を執り、上帝の敕に准じて、疾除罪簿司、斷地逮役司など九の官吏を呼び出し、「幽魂のために、請降胞命元第一天元一黃演の炁、胎命元第二天洞冥紫戶の炁などを降すことを請う」て、

「科に依りて錬度し、命を度し登眞せしめんことを」と唱えるだけで、一つ一つ炁を降ろすことはしていない。次に「鬱單凝靈、禪善保神。梵監凝炁、驕樂會眞。寂然安藏、梵寶生津。化應流景、高虛曜神。無結無愛、列名帝篇。陰陽會神、三萬六千。二炁交映、內保三田。克登聖品、與劫同年。流雲玉輧、來侍帝軒。策龍駕景、高昇九天。急急如長生大帝敕」と唱える。最初の九句が、鬱單無量天から無想無結無愛天に對應していることは明らかであるが、續くところで「陰陽神を會すること、三萬六千。二炁が交々映じて、內に三田を保つ」とあるから、やはり炁と神によって再生することを表現している。そして祖炁を吹きかけ、符文を讀み上げ、水池で燒く。その符文は、疾除罪簿司、斷地逮役司など九の官吏に下され、「誰それのために、眞炁を降し、神を生じ質を育て、命を度し登眞すること、一に玄科の如し」（卷四五）と述べている。

すなわち九天錬度は、九炁を降すことを請願して對應の器官を再生し、そこを守護する神々を配置する、つまり死者に新たな身體と神々を再生する儀禮といえるが、どこまで成仙の過程を反映するという意識があったかについては明確ではない。

『金氏大法』卷三七の最後のコメントで、金允中は「蓋し陰陽の正炁をもって、その魂魄を錬し、その散じ蕩（は）たしたものを聚め、その神明を復し、その翳濁を去る。亡靈に尸形の已に壞れた者は戀するに足らないこと、靈識で再び聚（あつ）めた者は生に還れることを明らかに知らせる。然る後に九天上帝に啓告して、靈津を降すことを請い、九炁を下し鍾（あつ）めて、形神は方に復し、重ねて道性に資し、再び根宗を立てる」[28]と述べている。すなわち「陰陽の正炁をもって、その魂魄を錬し」というのは、水火錬度を指し、「その散じ蕩（は）たしたものを聚め、その神明を復し」というのは、炁を集めて身體を回復し、神々を配置することを意味しているのであろう。「その翳濁を去る」というのも錬度の作用である。そして後半では九天錬度によって形（身體）と神々を復した後、道性に目覺め根本を立て直すことに

觸れている。彼は錬度の作用を以上のように捉えていたと考えられる。

「はじめに」で述べた問題の③では、九天錬度と水火錬度の關係をあげていたが、ここではそのことについては、金允中の見解を擧げただけにとどまった。二つの錬度の關係や、水錬と火錬の順番やそれぞれの位置づけなどを含む、錬度儀禮の全體の構成についての問題は、次回の課題とさせていただきたい。

二・三 符の發行

次に「はじめに」で擧げた④の問題にあたる、發行する符について述べていきたい。

二・三・一 五芽符

「五芽符」に關する儀禮は、『濟度金書』では水錬の最後、火錬に入る前に位置づけられている。ここではまず次のように述べる。「錬度を行うにあたって、惡根が宿っているので、冥界に沈み、五炁が飛び去り、骨も亡くなって、臟腑も再生できず、身體・精神とも整えることができない。……そこで（五靈五老帝君に）五芽の妙化を降し、炁に委ねて形を聚め、五老の靈華を灌いで、元に還し質を復する、法體を全うすることをなし、卽ち仙鄕に邁（ゆ）くことを證するように願う」[29]。次に五方の各方に向かって、五老五帝に祈願して、五芽にあたる各方角の色の眞炁（東方ならば青炁）を降して、對應の臟器（東方ならば肝臟）をはじめ亡魂の體內に行きわたらせる。例えば東方ならば次のような表文を宣する。「謹んで青帝直符を召す。上りて九炁青天安寶華林青闕青靈始老天君の蒼帝宮に詣で、請うに青平青炁を以てし、亡魂に灌注し、泥丸に流入し、九炁を分布して、九戶に煥映して、直ちに肝宮に入り、下は百脉に注ぎ、肝神龍淵含明を守護し、三魂はこれを衞り、肝炁をして鬱勃とせしめ、紫微（上丹田・膽）に周流し、上は目瞳を瑩（てら）し、下は玄闕に漑（そそ）ぐ」[30]。『雲笈七籤』卷一〇一には「青靈始老君紀」をはじめ、五老五帝の傳が載せられているが、「青靈始老君紀」には、始めに「洞玄本

行經云、東方安寶華林青靈始老帝君者」とあるように、五方ともに五帝の名稱は一致している。

そして最後に「五炁を理（ととの）え、五神を返すに、已に帝力を承ける。五芽を灌ぎ、五體を滋（うるお）すに、また天の休（たまもの）を藉りる。謹んで亡魂のために、東方青芽朝華の炁、南方朱丹凌霞の炁、西方白石玉醴の炁、北方玄滋瓊飴の炁、中央琳華醴泉の炁を攝り降し、五藏に流布させ、百關に灌沐させ、表裏を豐盈させ、形・神を澄正にさせることを希う」[31]と唱えるが、この文がこの儀禮全體の祈願內容を代表する。すなわち（五）帝の力を借りて、五炁を整え、五神を返し、さらに五芽（五炁）を五體・五臟などの身體に注ぎ、身體・精神を清澄にさせると述べている。『雲笈七籤』巻五十七「服氣精義論・五牙論第一」には、「服眞五牙法」として五方の氣を服することを記しているが、その際に唱える呪文は「東方青牙、服食青牙、飲以朝華」となっており、名稱もほぼ對應している。この句は『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』巻下「元始赤書服食青牙導引九炁青天玉訣」に、夜明け時に青牙を服食する際に唱える呪文として記されており、南方・中央・西方・北方も同様である。また『太上洞玄靈寶五符序』巻下にも、五芽を食することが記されており、東方の呪文は「東方青芽、服食青芽、飲以朝華」となっている。この五方の眞炁である五芽を服する方法は六朝初期から行われていたことが分かる。[32]

『金氏大法』では、火錬の終了した後、次のように唱える。「火沼官將、火錬玉童玉女は、亡魂を引領して、流火の池から出させ、五芽の眞炁を灌漑し、百神と混合させるように」[33]と唱えて、火錬神將、玉童玉女が、亡魂を引領して火池を出させると存思する。ここでは「五芽の眞炁を灌漑し、百神と混合させる」とあるが、「度人經四注」巻三の「中理五炁、混合百神」という句に對する嚴東の注には、「百關を整え、神・氣を和合させる」とある。これに從えばここの意味は「五芽の眞炁を灌漑して、百神と合わせる」ということになろうか。そして「五芽眞文符」を燒き、各方角の呪文を唱える。東方に

關しては「謹んで東方青帝、青靈の童、甲乙の官に請う。虚空中より來り、厥陰の炁、青芝の玉漿を齎し、亡魂の紫微宮に灌漑するように」という呪文を唱える。金允中はこれについて「人は五行を備えて生れるので、今再び五行の炁によって、その魂を錬するのである……故にその後は五方の靈芽を召す、則ち五行の炁である」[34]と述べている。

『立成儀』では、「化生十二炁符」を發行した後、「五帝玉司眞炁符」を執り、「上帝の敕に准じて、謹んで青帝直符區更生、赤帝直符祝昌中、黄帝直符玉眞、白帝直符辱曲正、黒帝直符尹豊を召し」と五帝直符を召し、續いて「謹んで亡魂のために安寶華林青牙之炁、梵寶昌陽朱丹之炁、玉寶虚玄黄庭之炁、七寶金門明石之炁、朔單鬱絶玄滋之炁を降すを請う」と五方の炁を降すように請う。そして「科に依って錬度し、質を錬して仙に變える」と述べる。『濟度金書』では五方直符に五老五帝のところに行かせて依頼していたが、ここではそのことは明確には示されていない。また『立成儀』で降すとされている炁の名稱は『濟度金書』に對應している。そして五帝の祕諱を默誦して、五方の炁を取って符に吹き、火池中で焚く。この「五帝玉司眞炁符」は卷四三に「五帝玉司符」として五種類の符が載せられている。

この「五芽符」の發行は、三つの科儀書ともに共通しているが、その目的は五老五帝に祈願して「五炁を整え、五神を返す」ことにある。九天錬度と同様に、炁と神による再生が目指されているといえる。

二・三・二 化生十二炁符

また『立成儀』では、火錬の後に「化生十二炁」を呼び寄せて取り込む。始めに「一炁大將軍符」を取り、「謹んで長生大帝君一炁六元運陽化陰大將軍楊元光・從官符吏等を召す。亡魂のために腎水少陰の炁を攝（と）り降ろすように」と唱える。次に生腎符を取って「謹んで腎神玄冥君、字は育嬰に請う、攝るように」と唱え、親指で「子（ね）」の位置を押さえ、北の炁を取って符に吹き附けて、符を燒き、亡魂に吹き附ける[35]。このよう

にして心・肝・肺・脾・膀胱・小腸・膽・大腸・胃・三焦・胞胳に炁を吹き込んでいく。ここの腎神以下、五臓と膽の神々の名前は、『黄庭内景經』に出てくる五臓と膽の神の名と字に對應している。すなわちこの儀禮は、五臓・六腑と心胞胳の十二の器官に對應する炁を降し、その神を招請するものである。巻四三には「混元十二炁混神三景眞符」が載せられているが、最初の例を擧げれば「一炁六元運陽化陰大將軍符」と「生腎符」の二組から構成され、十二炁に對應した十二組が記されている。『濟度金書』巻二六八に載せる「生腎符」など十二種の「十二經絡符」は、「立成儀」巻四二に載せる「混元十二炁混神三景眞符」と形は異なっているが、「生腎符」などの名稱は一致している。

この「化生十二炁符」について、金允中は次のように述べている。「符で十二經絡のようなものは、則ち託胎の後、九炁が形を結し、九月に神が布し炁が滿ちて能く聲を發する、この時にあたって、經絡は自ら生じる。故に首に水火の二錬を以てし、終りに九炁を以て形を結する、鬼魂が生に反（かえ）るという事は、これで畢（おわ）る[36]」。すなわち「九炁が形を結し、九月に神が布し炁が滿ちて能く聲を發する」ようになれば、十二經絡はおのずから生ずるから、「化生十二炁符」のようなものは必要ではないと言っている。そして水火の二錬と、九炁の錬度により、「鬼魂が生に反る」と言っている。すなわち彼の考えによれば、二つの錬度により亡魂は再生するのであるから、この符による儀禮は不必要だというのである。

二・三・三　大洞十八玉符

『濟度金書』では、「水錬變仙符」を宣した後、「大洞十八玉符」を發する儀禮を行う。まず次のような呪文を唱える。「謹召玉清大洞腦神1泥丸赤文昆洞嘘嘘君、左目神通光玄冥君、右目神2晨嬰陰精君、舌神3騰陽正生君、心神4玄珠玄玄君、肝神5青帝孟光君、脾神6紫庭延澤君、肺神7皓洞黍成君、腎神8太淵飛都君、陰神9續命伯强君、胞神10元常秋夫君、胎神11含生宣和君、結

神12九華遐彥君、節神13杳浩空猷君、血神14中幽良弼君、精神15元徐祝祝君、炁神16無英毳毳君、神神17天生靈父君、命神18正中幽田君。奉爲亡故（某）、安鎭身中、周帀羅布、俾宮室全復、神炁固凝」（巻一〇六・一二b－一三a）・（番號は筆者）。すなわち身體の十八の器官に對應する神々を招き、死者の身中に安鎭させ、宮室を全て回復させ、神炁が凝固するというものである。この符は巻二六八に、符を書く時の呪文は巻二七九に收錄されているが、腦符の場合は「泥丸・絳宮（上・中丹田）の衆神が命令を受け、腦神が急ぎ降臨する。私に治鍊を與え、速く腦を形成してください」という內容である。そして符を白い絹に朱書して、腦神の名赤文混沌君字嘘嘘を呼び、左手の辰のポジションを親指で押さえ、上方の炁を取って符に吹き込む。これらからすれば各器官の神が來臨して、器官を再生することを願うための符ということになろう。

『立成儀』巻四二にも、「靈寶召五神混合符」に續いて、「大洞十八玉符」に對應する符が列擧されているが、しかし『立成儀』では普渡における「疾病の治療」の儀禮の際に、發行されることになっている（巻二九「上清五府攝召幽魂全形昇度還神復性儀」）。

以上鍊度儀禮のうち、水火鍊度に關しては、「身體あるいは魂神を對象に、塵垢・罪苦を洗い清める」こと、および「陰の要素が消えて、陽の要素になり、罪や冤が消える」ことが、九天鍊度では「九天の炁を降ろして死者に新たな器官を再生し神々を配置する」ことであるといえる。そして鍊度儀禮の中で發行される「五芽符」等の符については、九天鍊度と同樣に炁と神による再生を目的としていると言えよう。確かに最終的に天界に昇登することを示す呪文の他に、「依科鍊度、鍊質變仙（『立成儀』「五帝玉司眞炁符」の祝文）、「鍊質凝眞、登仙悟道」（『立成儀』「法師召神」）、「鬼復爲人、身當仙化」（『金氏大法』九天鍊度前の「高功再白」）、「變形鍊骸、骨化成仙」（『金氏大法』「焚玉嬰神變符」の呪文）、「得成胎仙、逍遙上清」（『濟度金書』「焚五芽符」の呪文）、「伺候嚴新冠帶、保舉升仙」（『濟度金書』「焚全形符」の呪文）など成仙を

ほのめかす呪文も多く存在する。しかし周知のように、人間が成仙を目指す修行はかなり厳しいものが要求される。それを靈魂だけの存在である亡魂が對象であるとは言え、成仙を達成していない高功が、そもそも彼を仙人にすることが可能なのだろうか。實際の錬度儀禮の内容を見ても、「亡魂を仙人とするための儀禮」が存在しているとは言えない。ここで見てきたように實際に目的とされているのは、天界への生まれ變わることであるように見える。次に最終的に死者に對して發行される文書について、この問題を考えてみたい。

三　死者に發行される文書と金允中のコメント

『金氏大法』によれば、拔度の對象となる亡魂には、「太上洞玄靈寶長生度命無上黄籙」（以下「無上黄籙」）、四鎮合同符、昇天大券等が授與され、「無上黄籙」には「救苦眞符」、「長生靈符」が含まれる。卷二九に見える「正薦功德牒」によれば、傳授が「靈寶上天黄籙一階」、給與が「昇天大券」、「昇天左右券」、「四鎮合同符」、「酆都山眞形」である。

『金氏大法』卷三二には、「救苦眞符」、「長生靈符」の散形符と聚形符およびそれぞれの誥文が載せられているが、前者の誥文は「誰それの靈魂を救濟して、地獄を離れ、光明を見て、罪は許され、恨みは解かれ、九龍度命の功德に乘じて、天堂に上生するように」[37]となっており、後者の誥文は「誰それの靈魂を超度して、朱宮流火の庭に登り、玉眸は質を錬し（火錬）、黄華は形を蕩（あら）い（水錬）、名は天界の名簿に書かれ、金籙度命の功德を承けて、直ちに昇遷するように」[38]というものである。

「四鎮合同符」は、對角線によって四つに切り、それぞれ固有の方法によって記述し、一つを天門吏に附し、一つを名山・福地・巖穴・洞天の中に投じ、一つを亡魂に附し、一つを天上の人々に齋功を證明するためのものとなる。金允中は、これに對するコメントの中で、「亡くなった罪魂は、齋による救濟を受けて陰翳を錬し除き、重泉の中を脱することができた。そして資格に從って化

を受けられる。これだけでも大きな幸いだ。直ちに九天に登ることができるだろうか。四鎮合同符の一片を亡魂に與えるのは、高功が自分の功德は幽冥に通じ達するには十分ではないと考えて、もし高眞が憐れんで上奏を可としてくれても、亡魂がどこへ行くかは明確にできないので、その他の符は三界に分けて、亡魂の行くところで契を合わせて、そこへ移ってから資格に從って化を受けて、罪魂となることを免れる。これがこの符の意味だ。もし亡魂が天に上るというのなら、三界に分ける必要はなく、錬度所で燒く必要もない[39]」と述べている。すなわち金允中は、これらの儀式を經ても、必ずしも天に上るとは限らないと主張している。だから高功も亡魂がどこに行かされるかわからないので、どこへ行かされてもいいように幾つかに分けて發行するのだというのである。

これは本來天上へ再生する資格を保證するべき「昇天大券」へのコメントでも同樣で、「亡魂はこれを得ることができれば、三界で拘留され、沈み込むことは避けられるが、天門に昇り入れるというわけではない。功行が十分でなければ、救濟されたといっても、天門に入り上帝に朝謁するには當たらない。中界にあって、これを身の寶として、化を受け再生できるだけだ[40]」としている。すなわち儀禮を受けた亡魂が仙人となって昇天するどころか、天界に上昇することさえ否定している。

實際現在臺灣で紅頭法師が行っている打城でも、儀禮で讀まれるテキストの上では、亡魂は天に上るとされているが、實際には子孫がいる者は冥界にとどまって彼らの祭りを受け、子孫のいない者だけが極樂往生し、水子や夭折した男兒・女兒のうち、養子を取ったり冥婚をしたりしなかった者（子孫が確保できなかった者）は、投胎（生まれ變わる）するなど、樣々な道をたどると解釋されている[41]。おそらく宋代でも科儀書では、その子孫が黃籙齋に參加した亡魂は仙人になる、あるいは天界に上昇するとなっていても、實際には定期的に祖先として祭祀され、供養が行われたのであろうから、金允中のコメントに見えるように、一般人の閒あるいは知識人たちにおいては、必ずしも仙人となったり、天界に上昇したりする

とは考えられてはいなかったのではなかろうか。拙著『宋代の道教と民間信仰』第二章第二節で指摘したように[42]、宋代の知識人たちは、佛教・道教式の葬儀を批判しながら、それらを行わないと却って不孝といわれるような狀況になっていた。たとえば司馬光や陸游などは、佛教や道教の唱える地獄の説を批判しているが、『夷堅志』などこの時代の筆記小説には、亡魂が地獄から解放されるために水陸齋や黄籙齋を行ってくれるように依頼したり、誤って地獄に連れていかれた人が、地獄を見學して歸る際に死者に、子孫にこれらの儀式を擧行するように傳えてくれと頼まれたりする話が多く載せられている。すなわち佛道式の葬儀を行う主要な目的は、亡魂を天界に昇らせることより地獄から救濟することであったといえる。ただ現在の臺灣の打城において觀察できる儀禮のテキストとその解釋の相違は、テキストと儀禮を行う宗教者の解釋の相違であり、この論文で指摘する宋代の狀況は、儀禮のテキストと知識人（ここでは金允中を道士というより、道教儀禮のテキストを校正・編纂する知識人道士と捉えている）の解釋との違いである。それで正確には對應していないといえるかもしれない。

『金氏大法』卷三三に載せる「無上黄籙」には、次のようにある「誰それの亡魂に太上洞玄靈寶長生度命無上黄籙一階を傳授することを乞う、（亡魂は）これを持って三界を過ぎ度（わた）り、資格を調べ超昇させる。……九幽の大罪を消し、名を天に記すべきである。察名童子、五戒威神、六宮掾吏は、簡文に從って受戒の弟子を守護するように[43]」。しかし卷三二に載せる「元始符命」以下四符の聚形符と告文のコメントでは、「その説には『嗣受靈寶弟子は、まさに九祖を昇らせ、一身を過ぎ度らせるに關わる』と謂う、これ傳度の式を以て、この符を給い告げる[44]」とあって、死者を靈寶弟子とする傳度の式によって、自らと九祖を救濟すると述べている。これからすれば、まさに佛教式の葬儀において、死者を佛弟子として西方淨土に旅立たせるのと同様の發想が、黄籙齋においても見られたのではないかと想像される。

前章では錬度の呪文や存思もしくはそれに關連する符

では、字句には表現されてはいるものの、必ずしも亡魂を仙人にすることは目指されていないことを述べてきた。黄籙齋で亡魂に授與される文書の内容も、天界に上昇することは表現されているが、成仙については表現されておらず、金允中のコメントには、さらに明確に天界へ上昇することも否定している。與えられる文書を見る限り、佛教の死者儀禮と同様、道との合一を目指す、弟子としての資格を與えることが目的であったといえるのではないだろうか。

四．おわりに

鍊度を構成する一連の儀禮の最終的な目的は、佛教の死者救濟儀禮が亡魂のこの世への執着を斷ち切った後、佛弟子とした上で淨土に送り込むことであるのに對して、亡魂を新たに復活させ仙人としての資格を與えて天界に送り込むことであるといえる。鍊度のもともとの目的はこれであり、そのための重要な一環と捉えられたのであろう。

水鍊は「穢れ（罪過によるものなのか）を洗い流すこと」、火鍊は「形神を鍛えなおし、穢炁・陰炁を陽炁に變える」のが主な目的である。成仙を目指す內丹の行法では、その成果を得ることでさえ難しいのに、その成果を亡魂に回向するというのは、理論的に裏附けるのにも、かなり難しいのではないか。鍊度にみられる存思の內容も、內丹に類似するところもあるが、やはり靈寶系の存思の系統を引くものとみられる。

復活の過程で重要なのは神と炁とされているが、その理論づけは様々である。たとえば「炁によって身體を形成し、そこに神を宿らせる」という考え方もそのひとつであり、九天鍊度や鍊度の中で發行される「化生十二炁符」、「五芽符」、「大洞十八玉符」なども、神と炁に係わる。符を發行する際の呪文・祝文、說教などの中で示された、性、神、炁・氣の捉え方についてはさらに整理が必要である。

宋元時代の儀禮書に見える文章の作成には、かなり知識人の見解が入っていると考えられる。ここでは金允中

の鍊度と黄籙齋に際して亡魂に發行される文書について、彼の考え方を考察してきたが、道教學會での發表の際に考察した、彼らの鍊度についての理論に關してはここでは取り上げることはできなかった。これについても次回に受け繼いでいきたい。

註

（1）　拙稿「佛教施餓鬼與道教普度」（「比較視野中的道教儀禮」國際學術研討會、香港・中文大學、二〇一五）四二〇-三五頁。

（2）　拙稿「鍊度的「鍊」：基於宋元道教齋醮科儀著作」（「歷史與當代地方道教研究國際學術研討會、臺北・政治大學、二〇一八）三五-四九頁。

（3）　拙稿「道教の鍊度と祭鍊について」（『社會文化史學』六三號、二〇二〇）一-二四頁。

（4）　拙稿「《太極祭鍊內法》與鄭思肖的宗教思想」、『道教與地方宗教：典範的重思國際學術研討會論文集』（臺北：漢學研究中心、二〇二〇）四六-五七頁。

（5）　陳文龍『王契眞『上清靈寶大法』研究』（濟南：齊魯書社、二〇一五）。

（6）　存諸曹局功曹、乘雲御炁、浮空而下。各爲係鍊亡魂、收召魂神、澄其性識、使之受鍊（卷三七・一九b）。

（7）　想亡魂入水池濯質（卷三七・二一a）。

（8）　天帝有敕、使者須聽。攝召亡魂、蕩濯身形（卷三七・二一a）。

（9）　大玄法水、五行之數。生育萬物、死能滌苦。若非大道、何以濟度（卷三七・二一b）。

（10）　已枯復榮、已滅復生。得生天上、更稟太靈。九天之敕、返復胎嬰。穢炁斷除、白尸返生（卷三七・二二a）。

（11）　仙人吐潤、鍊度亡靈。內外朗徹、表裏洞明。百關九竅、元炁滋榮。五臟六府、萬神自生。胞胎結節、隨水開扃。死炁斷絕、惡根沉零。我今鍊化、死骸生魂。返故改貌、玉體金容。變化鍊穢、飛昇紫宸（卷三七・二一b）。

（12）　運東井華、以滌幽魂。攬茲運容、太和之津。玄和玉女、灌之于神。魂神澄正、道炁長存（卷二七・一六b）。

（13）　鍊形淪垢、肅肅神儀（卷一〇六・一〇b）。

（14）　洗灌宿垢、飛躡天根（卷一〇六・一〇b）。

（15）　天河灌沐、清水度魂。飛英玄華、淘沐囂塵（卷一〇六・一一a）。

（16）　南方之君、赤炁之精。熒惑使者、丙丁將軍。朱雀炎神、赫赫陽精。五行造化、萬物發生。天帝有敕、使者須聽。攝召亡魂、鍊度眞形（卷三七・二三b）。

（17）　炎神炎神、火鈴火鈴。上通紫微、下極黃冥。却邪鍊魂、赤帝之靈。……鍊胎易質、魄鍊魂康。穢炁殂落、乘

烟飛揚。陰炁消釋、陽炁混康。精神益壯、洞入火鄉。混合九炁、總契虛皇（卷三七・二四a）。

（18）南方炎帝、凝精太微。丙丁正炁、朱雀騰輝。丹鳳流響、朱煙散飛。融英降炁、冶鍊陰儀（卷一〇六・一八a）。

（19）眞火陶鍊、形神肅清。罪翳消滅、冤債和平。經絡藏府、元陽敷榮。魂魄關節、一時回靈。改除故貌、萬竅光明。永離冥鄉、乘化霄征。壽均天地、億劫無傾（卷一〇六・一九a－b）。

（20）太陰鍊形、太陽回靈。幽尸沈翳、受陽之精。元炁重敷、攝歸萬神（卷一〇六・一九b）。

（21）務猷運化、鍊質成神。皮膚毛髮、肝神含明。耳目鼻口、心神守靈。筋骨牙齒、肺神虛成。孔竅精液、腎神育嬰。內外榮衞、脾神魂停。十二羅絡、陰極陽生。洞陽火鍊、玉胞金晶。得爲眞人、躡景神庭（卷一〇六・一九b－二〇a）。

（22）亡過（某）等、早纏世網、夙昧眞修、九炁無歸、五行蕩失、三魂受譴、萬劫飄流、不假良因、難回生理。當職既依典格、啓告眞靈。體乾坤造化之功、法陰陽和合之數。匹配水火、濯鍊神形。降兩曜之精華、結五行之沖秀。……鬼復爲人、身當仙化。除已表聞九天上帝、乞爲流祥頒慶、錄本生神。錫正炁於九關、合胎圓於十月（卷三七・二六a）。

（23）謹上請帝眞胞命元元一黃演之炁、纏其胞、使胞源宣通、上徹於天以生成（卷三七・二六b）。

（24）謹上請帝眞嶽府命元自然玄照之炁、纏其身、使三關五藏、六府九宮、金樓玉室、十二重門、紫戶玉閣、三萬六千身神、萬八千宮府、三百六十機關、根元本始、一時生神。令神布炁、炁滿能聲、聲尙神具、毛髮生身、諸天下臨、以保其身（卷三七・三一a）。

（25）夫三炁爲天地之尊、九炁爲萬物之祖……今爲亡過（某）、上請九天降炁、五體聚神。既膺大道之殊恩、當稟上眞之慈訓。蓋九炁生其神、三元育其質……皆大道之妙應、神靈之所生也。汝等若不能尊其炁、貴其神、省茲始末、念其本眞、以至躁動凡濁、淫惡亂心。則傷其神炁、炁盡神逝、魂沈五道、魄殁三途、業增九陰、殃流七祖、生生劫劫、休息無期、可不悲哉（卷三七・三一b－三二a）。

（26）謹召鬱單无量仙吏、上詣无映玄臺、請降帝眞胞命元元一黃演之炁、九重下降、爲受鍊幽靈纏其胞、使胞元宣通、上徹於天以生成（卷一〇六・二一b）。

（27）謹召无想无結无愛仙吏、上詣九華寶臺、請降帝眞岳府命元自然玄照之炁、九重下降、爲受鍊幽靈纏其身、使三關五藏、六府九宮、金樓玉室、十二重門、紫戶玉閣、三萬六千宮府、三百六十骨節、根源本始、一時生神、使萬神具備、毛髮生身、諸天下臨以得生（卷一〇六・二七a）。

(28)　蓋以陰陽正炁、錬其魂魄、聚其散蕩、復其神明、去其翳濁。使亡靈明知尸形已壞者不足戀、靈識再聚者可還生。然後啓告九天上帝、請降靈津、俾九炁下鍾、形神方復、重資道性、再立根宗（巻三七・四六b－四七a）。

(29)　奉行錬度、切慮惡根宿稟、幽域久淪、五炁奔飛、百骸解散、匪再生於藏府、曷重整於形神。……宸恩普被。降五芽之妙化、委炁聚形。灌五老之靈華、還元復質。爲成全於法體、卽證邁於仙鄉（巻一〇六・一三b）。

(30)　謹召青帝直符、上詣九炁青天安寶華林青闕青靈始老天君蒼帝宮、請以青平青炁、灌注亡魂、流入泥丸、分布九炁、煥映九戶、直入肝宮、下注百脉、守護肝神龍淵含明、三魂衞之、使肝炁鬱勃、周流紫微、上瑩目瞳、下漑玄關（巻一〇六・一四a）。

(31)　理五炁、返五神、已承帝力。灌五芽、滋五體、又藉天休。謹爲亡魂、攝降東方青芽朝華之炁、南方朱丹凌霞之炁、西方白石玉醴之炁、北方玄滋瓊飴之炁、中央琳華醴泉之炁、流布五藏、灌沐百關、俾表裏之豐盈、庶形神之澄正（巻一〇六・一六b－一七a）。

(32)　ここに擧げた六朝初期の二種の經典は、査讀の際に教授いただいた。記して感謝する。

(33)　火沼官將、火錬玉童玉女、引領亡魂、出流火之池、灌漑五芽眞炁、混合百神（巻三七・二四b）

(34)　以人備五行而生、今再資五行之炁、以錬其魂……故其後召五方之靈芽、則五行之炁也（巻三七・四六b）。

(35)　次法師爲亡魂、攝召化生十二炁。執召一炁大將軍符、祝曰、謹召長生大帝君、一炁六元運陽化陰大將軍楊元光、從宮符吏等、爲亡魂、攝降腎水少陰之炁。（焚符、存至吹所度之魂中）次執生腎符、祝曰、謹請腎神玄冥君、字育嬰攝（黑）。（子文北炁吹符、焚之、吹所度亡魂）（巻二七・一〇a）。

(36)　若符十二經絡、則託胎之後、九炁結形、九月神布炁滿能聲、當是之時、經絡自生。故首以水火二錬、終以九炁結形、鬼魂反生之事畢矣（巻三七・四七a）。

(37)　拔度亡故某人靈魂、出離地獄、永辭長夜、睹見光明、萬罪蕩除、冤仇和釋。乘此九龍度命功德、上生天堂（巻三二・二b）

(38)　超度亡過某人靈魂、上登朱宮流火之庭、玉眸錬質、黃華蕩形、書名紫策、受化更生。承此金籙度命功德、時刻昇遷（巻三二・四a－b）

(39)　況亡歿罪魂、一經薦度、錬除陰翳、得脫重泉之中。或得隨品受化、已是大幸。便欲使徑上九天可乎。四鎭合同、給一片付亡魂、則高功自揆已之功德行業、未能通達幽冥、縱使高眞垂憐、悉可其奏、尤未明能審亡魂所詣。故四鎭之符、分詣三界、俾亡魂所向、合契昇遷、隨品受化、免爲罪魂、斯其意也。豈可以爲亡魂上天去了、不必分三界、如此則亦不必焚之錬度所也（巻三二・二〇b－

二一a）。

(40) 亡魂得之、三界不復拘留、可免沉滯、非獨爲昇入天門而已。使其功行未該朝謁上帝、則在中界、亦爲身寶、度化更生而已（巻三二・二三b－二四a）。

(41) 呂理政『傳統信仰與現代社會』（臺灣・稲鄕出版社、一九九二）一九五－六。

(42) 松本浩一『宋代の道教と民間信仰』（東京・汲古書院、二〇〇六）。

(43) 乞傳授太上洞玄靈寶長生度命無上黃籙一階、付亡某人靈魂齎執、過度三界、證品超昇。……當消九幽大罪、標名九宮。察命童子、護戒威神、五帝直符、六宮掾吏、自當隨逐簡文、覆護受戒弟子（巻三三・一a－b）。

(44) 其說謂嗣受靈寶弟子、合關昇九祖過度一身、是以傳度之式給告此符（巻三三・一九a）。

執筆者紹介

松本　浩一　筑波大學名譽教授

孔　詩　東京大學大學院人文社會系研究科博士課程大學院生

池内早紀子　大阪府立大學大學院博士後期課程

土屋　昌明　專修大學國際コミュニケーション學部教授

高橋　睦美　大東文化大學專任講師

廣瀨　直記　明星大學教育學部助教

酒井　規史　慶應義塾大學商學部准教授

重信あゆみ　大阪公立大學客員研究員

横手　裕　東京大學大學院人文社會系研究科教授

脇山　豪　東京大學大學院人文社會系研究科博士課程大學院生

The Rite of Sublimating of the Deceased and the Intellectuals in Song Period

MATSUMOTO Koichi

The rite of sublimating of the deceased has been considered as the rite of making the deceased immortal. This paper based on the incantations and secret meditations which main Taoist priest make in the rite of sublimation described in "Great Lingbao Method Of the Shangqing Heaven" by Jin Yunzhong chapter 37, "Golden Book of Salvation according to the Lingbao Tradition" chapter 106, and "Standardized Rituals of the Supreme Yellow Register Retreat" chapter 27, assert that the purpose of the rite of sublimation in water is to purify the deceased from stains and sins, sublimation in fire is to replace the Yin elements with Yang ones, and the purpose of the sublimation of nine Heavens is to invite nine Breaths from nine Heavens and rebirth the nine organs of the deceased and to invite organs' gods and order them to protect the organs, the purpose of these rites of sublimation is not to make the deceased immortal. After the rite of sublimation, the deceased gets the documents which assure of his rebirth in the heaven but in these documents don't mention that the deceased will be the immortal. Jin Yunzhong in his comment for these documents even deny his rebirth in heaven.